

Title	清文鑑和解・満語纂編解説
Author(s)	羽田, 亨
Citation	東洋史研究 (1936), 1(6): 547-552
Issue Date	1936-08-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138716
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

清文鑑和解・滿語纂編解説

羽 田 亨

長崎の唐通事等が協力して作り上げた清文鑑和解（翻譯清文鑑）四卷五冊と、翻譯滿語纂編五卷十冊とについては、大正六年「藝文」第八年誌上に「長崎唐通事の滿洲語學」と題して、新村博士の論述が載せられ、從來の

所傳に新たに補訂が加へられた。余はこの四月長崎に遊び、縣立圖書館を訪うて親しく兩書を觀、多年の宿望を醫するを得たが、これが今より七十餘年の昔、殆んど何等參考に資すべき書物も無い時代に成し遂げられた辛酸の結晶であることを思ふにつけ、このまゝ天下の孤本として（假令一部分の傳寫が別に存するにしても）現狀に葬り置くことの悲しく、遂に増田館長の好意に慫へ、その全部を寫眞して我が東洋史研究室に備へ、また同學の希望に應じてこれを頒布することゝした。今東京帝國大

學文學部及び東洋文庫に備へられるものは即ちこれである。先人の功業を博く世に傳へることは後學の義務であると共に、その成績は今日に於ても尙ほ學界を裨益する所あるを信ずるが爲に外ならぬ。

清學參贊馮璞（潁川藤三郎）・鄭昌（鄭幹輔）・陳勛（平野繁十郎）三人の監修によつて、鄭永寧以下十四人の若い通事達が、翻譯滿語纂編第一卷二冊と清文鑑和解第一卷一冊とを作り上げた嘉永四年に先立つこと三十四年、即ち文化十三年には、江戸に於ては既に高橋景保の滿文輯韻が幕府に上られ、更にそれを補訂した増訂滿文輯韻や別に數種の滿語研究書が次々に出來たこと、既に新村博士の述べられた通りであるが、當時可なり事情のわかり合つてゐた筈の江戸と長崎との間に於ても、這般の消

息は碌に知れなかつたものと見え、この前年即ち嘉永三年から新たに満語翻譯の事業が長崎に於て始められたのである。従つて長崎では此の事業に關して江戸との間に何等の聯絡もなく、單獨の事業として、曾て四十餘年の昔に高橋が嘗めたと同じやうな辛苦を若い通事達が重ねたもので、この點誠に氣の毒に堪へぬ。但し高橋の事業が著しい成果を挙げたものにしても、なほ長崎の成果を悉く覆ふものでないことは、兩者を細かに比較して見る人には明らかなことで、これは前者を參照し得なかつた不幸の齎した幸運であつたともいふことが出來よう。

文化五年高橋景保が露西亞國皇書滿文の訓譯を命ぜられた年には、長崎の唐通事にも滿洲語修學の命が幕府から下された。(上引藝文參照)。然るに長崎では一向この事が進捗せず、その後も重ねて命ぜられて復た成らず、當初から五十年近い嘉永四年に至つて始めて成果の第一歩を踏み出すを得たについては、或は事に當つた唐通事が滿語研究を屑としなかつたが爲ではないかといふ意味の推察が、新村博士の編述中に見え、その證として蔡愼吾といふ人の墓誌に、これを裏書する文字が見える由であるが、目睹するに及ばなかつた旨が述べられてある。余も

このことに關心を持ち長崎逗留中にこの墓碑の穿鑿に苦心した結果、これも増田氏の盡力に依つて、遂に名高い本蓮寺の墓地からこれを發見することが出來た。これに據ると滿語研究の命令を蒙りながら辭退して應じなかつたのは、蔣愼吾の父に當る綺石先生といふ人で、愼吾は明治九年に三十八歳で歿したとのことであるから、その生時は天保十年に當る。また「十歳失怙」といふから、綺石先生の歿したのは嘉永元年である。生壽は判明し難いが、兎も角上述初めて滿語研究が長崎唐通事に命ぜられた文化五年から、三度目に同じ事業に従事した嘉永三年の前々年迄に互る頃は、この人の活動時代であつたことは疑ない。此頃の長崎唐通事には、明末亡命の客の系に出るものが多いのであるから、滿語研究の如きことを好まないのは、獨り綺石先生ばかりではなかつたらしく、これがこの事業の進捗を見なかつた重なる理由の一つであつたであらうことはほゞ疑ない。今墓碑の文中これに關する部分を摘録して置く。

明治九年丙子之歲十二月廿九日、地理寮御用掛蔡君以病卒于官。假葬東京四谷理性寺。享年三十八。有一男、名進一。尙幼。既葬。從祖母猪股氏、歸執喪

於家。明年丁丑秋八月、藏衣髮于先塋之次、以爲改葬之地、立石表之。君爲人明直、不苟合。是以歷仕大學・開拓・工部・內務、皆不得顯仕。君亦不欲也。君諱隆忠、通稱慎吾、號翠萍。其先明人。九世之祖蔡三官君、寬永中避亂、來家長崎。八世至綺石先生、始補譯司。嚴毅耿介、所爲不顧利害。幕府嘗令譯司兼學滿洲語。先生獨辭不能曰、祖先之所以遠違墳墓而來寓者、特惡左衽也。爲之子孫者、寧身伏于俎、安忍口稱侏離乎。先生君之父也。

碑は三重の臺石の上に立ち、表に「蔡慎吾先生之墓」と題し、向つて左の面から裏、右の順にこゝに引く文が鐫られ、所引以下には慎吾の陳春豫に就きて唐音を修得したと、英佛の語を究め、英國留學の志を懷いて果さなかつたこと、滿清は明の深仇であるから其の語を學ぶことは父祖の意と背馳するものであるが、英・佛は我と儼然同盟の國であり、殊に慎吾はその兵學地理を專攻しようとしたもので、徒らに駄舌を操らうとするのではないから、その心は父祖と一であることなどが記されて居る。耿介綺石先生の如くでないまでも、大概の唐通事が滿語を學ぶことを好まなかつた有様はこれによつても推知さ

れる。

さて清文鑑和解五冊は、乾隆の増訂清文鑑首卷から第四卷に至るまでを和解したもので、第二卷が上・下兩冊に分たれてある外、一卷一冊都合五冊で終つて居る。第二卷と第三卷との題名が翻譯清文鑑となつて居ることは、既に新村博士によりて傳へられて居る。この翻譯や校合に従事したのは、滿語纂編の編纂にも従事した鄭永寧・穎川雅範・彭城昌宣・彭城廣林・穎川春重の諸通事で、これ等が二人若しくは三人一組になつて各卷を分擔したことは、各卷の初めに譯述者校合者を示して居るところによりて知り得られる。此の書の體裁は挿入寫眞について認められるやうに、増訂清文鑑所收の滿洲語に我が片假名を用ゐて讀み方を示し、漢語の譯はそのまゝに移寫し、各語の下に註せられた滿文には、それ〴〵丹念に邦語譯を施してある。嘉永四年以來毎年一冊譯述した成績であるから、このまゝの步調では清文鑑一部三十二卷を譯するのに三十二年間を要する筈で、隨分漫歩といはねばならぬ。

翻譯滿語纂編五卷十冊は、前記清文鑑所收の滿洲語が部門別けになつて居るのを改めて、滿語の字頭によつて

集録したものである。部門別けでは辭書として用ゐるのには不便至極であるからこれを字頭順に改編することは、この書を活用しようとする誰もが試みることで、高橋の滿文輯韻の如きもその例に外ならぬ。併し滿語纂編は初めから清文鑑の同字頭の語のすべてを順次集めようとしたのではなく、その中の或る語を一巻中に幾つかづゝ採録したのであつて、その方針は第一卷々頭の序文の次に附けた凡例について認むることが出来る。即ち

一、夫此編ヲ纂スルハ滿洲通語脩學ノ試業課目ヲ設ケ、清文字母句首ニ置テ語ヲ成ノ要八十七字ヲ舉テ、學人十四名ニ分派シ、字母ノ次第ニ順ヒ、每字二三句、或ハ五六句、綜計四百零二句ノ詞ヲ譯編シテ冊ヲ成シ、翻譯滿語纂編ト標題シ、毎歲抄本二三冊……公廳ニ進呈ス。各自……頭幾十句ノ下ニ其姓名ヲ書載スルハ、此際脩學開創ノ功ヲ見ス爲ナリ。

一、清文字音ハ漢字ノ音釋ニ因テ發音スル所最精微ナリ。今國字ヲ以テ細ニ音釋ヲ加フト雖モ、悉ク牽引的準スルコト能ハス。況其口ヨリ出スハ漢音精通ニ非スンハ更ニ難シ。然ク如此ト雖モ、其字有テ豈其音無ランヤ。故ニ唯讀易キタメ、 本朝五十音

ノ例ヲ授テ音註ヲ施ス。但其中確實ノ音韻ニ協サル所有ヘシ。若詳略得中センヲ要セバ、須ク口授ニ據ヘシ。

一、滿語句毎々漢字ノ譯アリ。加之清文ノ註詞ヲ啓發シ、翻譯ヲ加ヘ、其理ヲ暢ベテ事物詳カナレハ、本文ニ和解ヲ加ヘス。清文恰モ國字……以テ同文異義スル事アレハ、詞ハ層見疊出……可カラス。總而虛字ノ言葉遣ヒ漢字ノ奧義ニ至ラス。漢字モ亦和語ノ簡ナルニ及ハサル事アリ。此ニ由ヲ漢字用サル事能ハスト雖モ、專ラ漢字ニ依テ解セハ、義深シテ却テ詞離ル事アラン歟。因テ訓詁ヲ異ニシテ、偏ニ理會ノ速ナルヲ要トス。

一、清文虛實ノ助字アリテ、能演ニ緣リ其意義ヲ表裏ニ轉易ス。乃 本朝ノ字訓ニ屬ト云ヘル實字ヲ屬ト云ヘハ虛ニ變ルノ類ヒ、清文ニ比較シテ毫釐モ違フ事ナシ。原ヨリ助語テニハ有テ備サニ文意ヲ述ト雖モ、事情聯關ノ宜ニ從ヒ、或其詞質ヲ失ハン事ヲ患ヒテ、用ル所ノテニハ畫一セサルヘシ。和語ニ月日、漢語ニハ日月ト云フ如キ、清文ニモ雄雌ト横縱ト……類ヒ尤多シ。皆 本朝ノ句調ニ仿

フ。又形勢聲響ニ屬スル詞ハ、人ノ耳目ニ觸レハ聊異國ト殊ル事アリ。能其意ニ協フモノハ和訓ヲ用レ^レ、俚鄙ニ涉ルモノハ、只字ノ傍ニ其ノ形勢ノ意ヲ記ス。現今清文翻譯創業ノ節、學者專心研究スルト雖^レ、尙未其深界ヲ指ス事能ハス。必ス後明ノ添削ヲ俟而已。左ニ衆學者姓名ヲ列ス

として、額川君平雅範以下すべて十四人の名を記してある。引用中の點線は剝落によつて文字の不明なところであり、句讀は便宜余の施したものである。

此の凡例の轉載を以て、余は今はこの書の一應の解説に代へなければならぬ。尤もこれは第一冊に附けられた凡例に過ぎないが、これによつて漸く滿語研究事業に出發した唐通事達が、初めから清文鑑所收の滿語をすべて字頭順によつて、一氣に一篇の辭書に改編しようとする覺悟を有したのではなく、兎も角その第一輯に於て每字二三句或は五六句を摘録して四百二句を集めたに過ぎず、翌年上つた第二巻もまた同じ方針と組織で總計五百二十一句を集め、以下三・四・五と進んでそれ〴〵六百一、四百三十二、五百九十九句を集めたに外ならぬことを知り得る。かくして通計二千五百五十五句を譯した安

政二年に及びその中絶を見るに至つたのである。都合よく進めば後に之を集大成して一大辭書とする筈ではあつたに違ないが、編纂方針から考へると、何やらそこに充分の覺悟の缺如して居つたものゝあることを感得しない譯には行かない。それにしてもその譯語の上にも大なる苦心が拂はれて大概正鴻を得、其の假名の音寫の上にも細心の注意が拂はれて居ることは感嘆しなければならぬ。例へば挿入寫眞に就いて見れば分るやうに、B第一行 *erečun* を寫すに *エルツム* と書いてある。*エルツム* と寫しては原との綴音に用ゐられた文字を表はし得ないから *re* を寫すに *ル*、*č* を寫すに *ツ* を用ゐ、兩字の切音によつて原音を示したのである。語尾の *n* に對して *m* を用ゐ、*ng* 音の *n* に對しては B 第三行に認めるやうに *n* を用ゐてあるなども周到の用意である。但し *č* を寫すにも *ts* を寫すと同様に *ウ* を用ゐて居るのは、尙工夫の加へらるべき餘地があつたと思はれる。高橋の滿語輯韻には此の種發音を示す方法は用ゐられてゐない。

滿語輯韻や増訂滿語輯韻、又は清文鑑名物語抄等と滿語纂編、清文鑑和解等との比較研究は他日に期せなければならぬ。兎も角江戸に於ける成果と共に、長崎に於け

る此等の編纂も、我が邦の滿洲語學發達史上に於ける顯著なる功績として、特筆せられねばならぬことである。

日本圖彙中の日本寄語

嘉靖末年、明人鄭若曾の撰した「日本圖彙」は、支那人の日本研究史上、眞に劃期的な名著であつたと云はれるが、本書内に收載された日本寄語（譯語）といふもの、よくよく、覗みかかるとなかな面白く、何となく興を益すと思はれる程のもので、幸ひ本誌の餘白をかり、以下順次一築に供し、原書のまゝ、（公羊）試附するところ。國名下のブランクなるは原

寄語島名

山城	羊馬	シヤマ
失羅	シロマ	
馬多	（多の野馬）	トヤマ
河内	茄懷	チカワ
知因	ミツ	
和泉	米因	ミツ
攝津	子弩	クツヌ
因（因？）	備	
伊賀	衣加	イガ
伊勢	舍衣	イセ
志摩		
尾張	倭阿	ヲア
里	リ	
迷茄	ミカ	
三河	懷	ワ

遠江	伊豆	因慈	イヅ
駿河	甲斐	苦藝	クニ
相摩	武藏	木撒	シムサ
安房	阿宅	アワ	
上總	倭撒	ラサミ	
下總	倭撒	ラサモ	
常陸	壤加	サワカ	
若佐	柵	サ	
越前	前曰智	デユンチ	

越中	越後	加賀	能登	佐度	近江	美濃	飛濃	信濃	上野	下野	陸奥	出羽	宮島	小島	連島	博多	
日晝	谷	坑茄	俣桑	沙渡	多島	米飯	智大	申阿	康子	計麼	子計麼	話收	迷外	迷埃	麼科什	卒刺	什麼哈
エチユウ	ゴエチ	カマ	ヌト	サド	ミト	ヒヌ	チダ	ノシア	コーツ	ツケモ	オーシユ	ミワ	シマ	マシ	マシ	ハマ	タハ

筑前	筑後	豐前	豐後	肥前	肥後	日向	大隅	薩摩	紀伊	炎路	阿波	讚耆	伊豫	土佐	山口	美作
職骨	職骨	骨前	蓬哥	非前	非谷	兄加	阿思	撒子	乞儂	山儂	齊換	伊右	拖撒	拖撒	即周防	撒家
ゼンク	ゼンク	ブゼン	ブンゴ	ヒゼン	ヒゴ	ヒユンガ	オス	マツ	クニ	クニ	アワ	イヨ	トサ	トサ	ヤマガチ	（續）

（昭和十年七月二十五日）

圖版第五

清文鑑和解(壹・參四)

御製增訂清文鑑卷一

頴川雅範譯述
鄭永寧校今

天部 一類 七則

あまのこゝろ 天の心

天文類 第一

あまのこゝろ 天の心

あまのこゝろ

あまのこゝろ

天。あまのこゝろは天の心。あまのこゝろは天の心。

翻譯滿語纂編(1上21)

コエルム

コエルム

人望。

諸人か類。思ふ人ナ、人望ト云フ。

コエルム

コエルム

コエルム

下馬牌。

皇門ノ兩側ニ立テ、人ヲ馬ヨリオホク

碣石ヲ、下馬牌ト云フ。

あまのこゝろ 天の心

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

風蘭。

根ヲ土ニ栽テ、花ノ麗ニツリ、

水ヲ添テ、振ケ、自然ニ葉生、花開也。葉ハ冬

あまのこゝろ 天の心